

氏名	廣瀬 恒平
学位の種類	博士（体育スポーツ学）
学位記番号	第30号
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	令和8年3月24日
学位論文題目	15人制ラグビーにおける防御戦術の立案および検証に関する実践研究：大学ラグビーチームにおける事例を例証として
論文審査委員	主査 高橋 仁大 副査 藤井 雅文 副査 長谷川 悦示 副査 中本 浩揮

## 論文概要

ラグビーでは、国内において古くから相手の下体への低いタックルが推奨されてきたが、海外では上体へのタックルが主流との指摘がある。ラックに関しては、世界トップレベルでは参加する人数が少ないとの報告がある一方、多くの人数を参加させる戦術も唱えられる。このように実践現場では様々な戦術が用いられる中、その有効性は検証されていない。そこで本研究では、ラグビーの防御局面におけるパフォーマンスとプレー成功要因との関連性を数量的に明らかにし、その結果を基にして立案した戦術を対象チームに導入して、数量的および質的に検討することで、戦術の内容や立案、導入の方法についての知見を提供することを目的とした。

研究課題Ⅰ（第2章）では、世界トップレベルにおいて使用される防御戦術とプレー成功要因を明らかにすることに加えて、非トップレベルに適すると仮定される防御戦術を検討することを目的とした。分析の結果から、タックルの高さについて、より高いレベルにおいて上体へのタックルが志向されていることが示された。しかしながら、トップレベルにないチームにとっては、下体へのタックルを志向してその成功率を向上させることが有効なのではないかと推察された。複数人によって行われるタックルアシストについてはその有効性が示され、タックルの高さとの相互作用からタックルアシストを伴う下体へのタックルが地域阻止に最も有効であると示された。また、前に出る防御の有効性も示され、ディフェンスラインを整備する時間的猶予を創り出すことが重要であると示唆された。

次にこの課題を解決するため、ラックからのボール出しの時間を遅らせる要因について検討した。ラックに参加した人数とボール出しの時間との関係を調査したところ、防御側の人数の多寡および防御側と攻撃側の人数差には関連が無く、攻撃側の人数の増加とボー

ル出しの時間の増大に有意な連関が認められた。また、ラックにおける防御側のプレーについて、ジャッカルが最もボール出しを遅らせる効果があると示された。

研究課題Ⅱ（第3章）では、対象チームであるA大学に適すると仮定される防御戦術を立案し、2024年度シーズンにおいて導入した。立案に際しては、第2章で得られた知見を基に、A大学の特性を考慮の上、バックキャスティング型アプローチの手法を用いて作成した。2023年度シーズンの最も大きな課題は、ボールを奪うことやボール出しを遅らせることが難しいラックへ無駄に参加して、数的不利な状況を招くことであった。また、大学からラグビーを始める選手が多く、経験や知識が乏しいことも、特性として挙げられた。そこで、ラックに関しては参加する選手をポジションで限定することとし、タックルの発生した位置や地域、成否によって参加する基準を設定した。2024年の春にチームへ導入し、練習および試合における試行とその後の選手へのフィードバック、チームとしての課題の修正を重ねた。

研究課題Ⅲ（第4章）では、立案した戦術による効果およびゲームへの影響を調査するとともに、戦術の内容や立案過程、導入方法までの一連の実践を検証することを目的とした。戦術導入前後の2023年度と2024年度の公式戦を記述的ゲームパフォーマンス分析によって比較したところ、タックルに関しては下体へのタックル比率が増加し、その精度も向上した。ラックに参加する選手をバックローおよびセンターに限定し、ジャッカルを多用する戦術は、概ね遂行され、ラックへ参加した際にはボール出しを遅らせることに成功していた。これら、戦術の遂行とプレーの成功により、前進して終了したプレー比率やボールを奪取して終了したプレー比率の増加といった、ゲームへの影響が認められた。

選手および外部識者に対するインタビュー調査からは、立案された戦術の内容は対象チームの特性を踏まえた妥当なもので、立案の過程や導入の方法についても、概ね肯定的な評価が得られた。また、ジャッカルを繰り出すのに適した状況について、選手の感覚や外部識者の持つ実践知が言語化された。さらに、研究対象としてあまり扱われてこなかった、戦術立案におけるデータの活用について、また関連する内容として実践現場において収集するデータ項目、データを提示する時期や量、対象レベルによる差異など、データの活用方法に関する知見も示された。

以上のことから、本研究の成果として、これまで明らかにされてこなかったタックルの成功要因およびラックからのボール出しを遅らせる要因についての知見が提供された。立案した戦術について対象チームに導入し実践した結果、概ね遂行され、遂行された際の戦術の効果とゲームへの好影響が数量的に確認された。選手および外部識者へのインタビューからも概ね肯定的な評価が得られたことから、立案した戦術のA大学への適性と一定の有効性を見ることができた。

## 論文審査の要旨

廣瀬恒平氏の博士学位論文は、ラグビーの防御局面におけるパフォーマンスとプレー成功要因との関連性を数量的に明らかにし、その結果を基にして立案した戦術を大学ラグビーチームに導入して、その結果表出したパフォーマンスの変化について量的および質的に検討することで、立案した戦術の評価を行うとともに、戦術の立案過程やチームへの導入、実践までの活動全般に対する評価を明らかにし、ラグビーの実践研究や戦術研究への知見を得ることを目的としたものである。その要旨は以下の通りである。

第1章では、ラグビーの防御局面におけるタックルからラックまでを含むブレイクダウンの重要性を示すとともに、それを明らかにするための研究方法や実践研究として進める際の研究課題について整理している。記述的ゲームパフォーマンス分析を用いた国内外のラグビーに関する研究を概観した結果、タックルやラックにおけるプレーを成功させる要因は明らかにされておらず、個人・グループ・チームによる防御戦術とゲームとの関連性についても報告されていないこと、さらに戦術の検証を目的とした研究は非常に少なく、実践的な戦術研究の方法論が確立されていないことが示されている。

第2章では、記述的ゲームパフォーマンス分析を用いて、タックルとラックにおいて表出したパフォーマンスとプレーが成功する要因との関連性について検討している。ラグビーワールドカップにおける計23試合ならびに全国大学選手権大会における計7試合を対象に、タックルとラックにおける戦術に関わる項目のデータを収集し、各局面での結果の成否との関連を検討している。その結果、タックルにおいてはタックルアシストが有効であることや、攻撃側を押し込ませずに倒すにはタックルアシストを伴う下体へのタックルが有効であることを示している。またラックにおいては攻撃側の参加人数がボール出しの時間に関連していることや、攻撃側のボール出しを最も遅らせる手段はジャッカルであることなどを示している。

第3章では、著者が指導するA大学ラグビー部にブレイクダウンに関する戦術を検討・立案し、導入する実践過程を詳述している。戦術の検討・立案にあたっては文献研究ならびに第2章で得られた知見を基に、A大学の特性を踏まえてコーチングスタッフとともに行なっている。A大学ラグビー部の特性として、地方大学3部リーグに所属するチームであり、大学からラグビーを始める部員が多く、ラグビーに関する知識や経験が乏しいことが挙げられている。本実践前の2023年度のブレイクダウンにおける問題はラックへ無駄に参加して数的不利な状況を招くことであったことから、ラックに参加する選手をポジションで限定し、タックルの発生した位置や地域、成否によってラックに参加する基準を設定している。タックルにおいては下体へのタックルを志向し、可能な限りタックルアシストを発生させることとしている。2024年の春にチームに導入し、トレーニング期間での試行を踏まえて当初立案した戦術を修正しながら、2024年度シーズンにて実践している。

第4章では、A大学ラグビー部に導入したブレイクダウンの戦術の効果について、2023

年度と 2024 年度シーズンの公式戦各 5 試合を記述的ゲームパフォーマンス分析により比較している。その結果、タックルでは下体へのタックル比率が増加しその精度が向上したこと、タックルアシストの増加は見られなかったこと、ラックではラックに参加する選手の限定ならびにジャッカルを多用するという、第 3 章で立案した戦術が概ね遂行されていることが確認されたとしている。さらに試合に出場した選手ならびに外部識者へのインタビュー調査を行い、立案された戦術の内容や立案過程、導入の方法等についての調査がなされ、概ね肯定的な評価が得られたとしている。

第 5 章で著者は、本博士論文の総括を述べている。本研究の成果として、ゲームパフォーマンス分析によりこれまで明らかにされてこなかったタックルの成功要因およびラックにおいてボール出しを遅らせる要因を明らかにしたこと、記述的ゲームパフォーマンス分析から得られた知見を基に著者が指導するチームへ導入する戦術を立案し導入した結果、導入した戦術が概ね遂行されゲームへの好影響が数量的に確認されたこと、戦術を立案する過程やその内容について質的調査により肯定的な評価が得られたことを挙げ、本実践の有効性を示すとともに、ラグビーの実践研究や戦術研究を行うためのフレームワークを提示し、実践的な戦術研究の方法論上の示唆を提供している。

本博士論文は、ラグビーにおける防御戦術を研究主題とし、記述的ゲームパフォーマンス分析を基にした戦術の立案と導入、その効果を量的・質的な観点の両面から検証するという、ラグビーの戦術研究ならびに実践研究として高い独創性がある。特に、記述的ゲームパフォーマンス分析の結果を著者の指導対象チームに適した戦術として解釈する過程を文献研究ならびにチーム特性との関連から詳述し、その効果を量的な研究手法と質的な研究手法の両面から検証するという本博士論文全体の構成は、ラグビーという一競技のみならず、球技全般の実践研究や戦術研究を行うためのフレームワークとして、高い学術的な意義を有する。

論文審査の結果、本論文は審査基準を満たしていると認められた。